

91

35

現今之社會學

039504-000-9

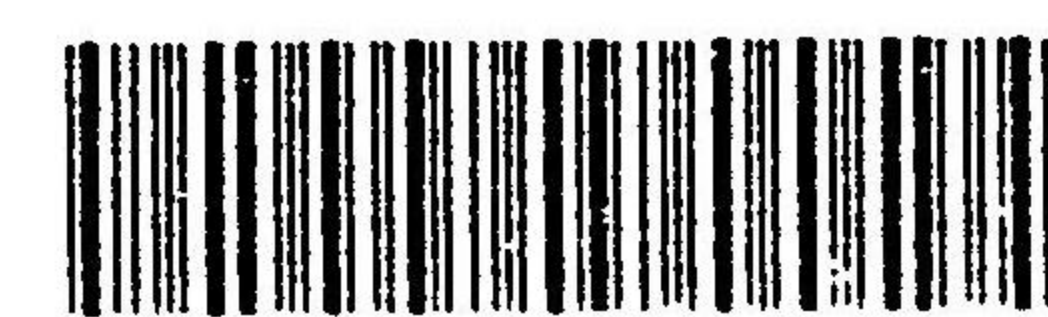
91-35

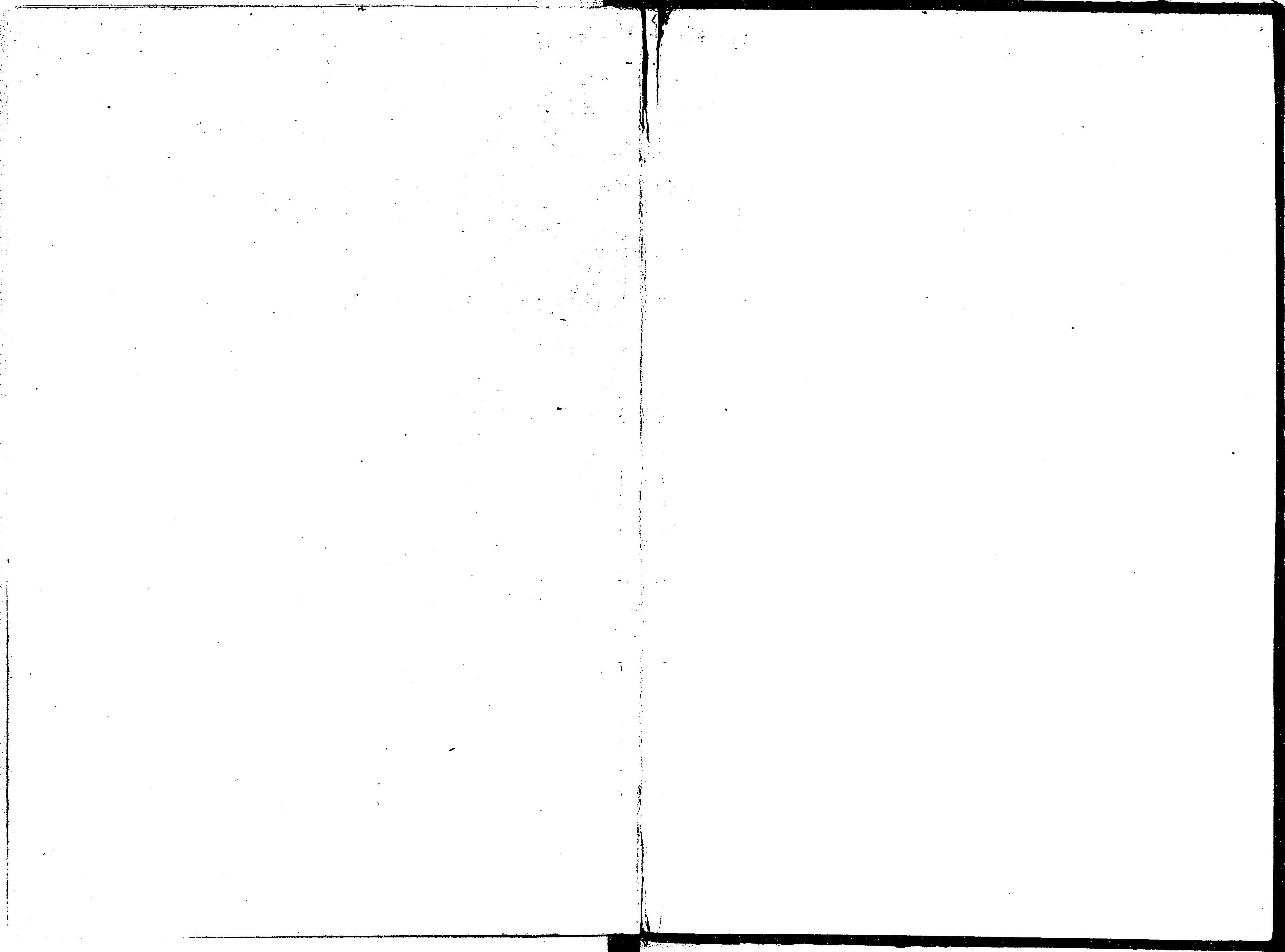
現今之社会学

遠藤 隆吉/著

M34.7

BDA-0057





91-85



文學士遠藤隆吉著

現今之社會學

全



東京
大阪

金昌堂
集成堂

現今之社會學序

社會學者論社會現象之學也。社會現象明而後社會學可得以成也。華士斯邊鎖接弗烈。豪傑之士。著書何限。而若其所論者。茫乎不知所歸焉。要歸不知社會現象爲何之故也。可不嘆耶。余好斯學。研鑽有年。偶得魏氏之書。以讀之。反覆之久。得社會現象出於集合意識之說。始識斯學庶幾乎成矣。乃論著

以乞識者之教云爾。

明治三十四年五月

遠藤隆吉

目次

一般の説明	一
本編の心理學	三
總論	六
第一章 現今の社會學の弱點	六
第二章 社會學史に於ける同類意識説の位置	一四
第三章 社會現象	一六
第四章 社會學の體系	二〇
本論一	二三
序言 集合意識實現の法則	二三
第一章 社會進化論	二七

第二章 社會本質論……………三八

 第一節 社會組織論……………三八

 第二節 社會進動論……………四八

本論二……………五二

 第一章 社會と個人との關係(一)……………五二

 第二章 社會と個人との關係(二)……………五八

結論……………六一

 第一章 結論……………六一

 第二章 社會に汚隆ある所以……………六二

 第三章 世界は社會なるか……………六三

跋……………六五

現今之社會學



一般の説明

文學士 遠藤隆吉 著

社會は人間の集合なり個人なれば社會なし故に社會は個人より成ることは疑ふべからず然れども個人は如何んして維持せらるゝかと云ふに合意に由りて維持せらるゝなり合意とは何んぞや曰はく各個人が社會なる個人の集合と其の集合體內に於ける自己の位置とを意識し以て相互に満足しつゝあることなり是の故に社會は一方には人間の集合なれども一方には合意の上に成立する精神の聯合なり

社會なる意識は各個人の精神中に在り此の意識曰ふは觀念とに該當して客觀界に社會あり次ぎに社會なる意識に附隨して自己の位置なる意識あり自己の位置は即ち自己の社會に於て爲すべき活動を意味す此の自己の位置なる意識に該當し

一般の説明

て客觀界に自己の活動あり。各個人が此の如き活動を爲す。今や社會は合意の上に成立せり。即ち各個人は社會なる意識と自己の位置なる意識とを調和して所有し以て満足す。此の如き精神の状態は各個人に在り。之を抽象して考ふれば自己の位置なる意識(各個人)は社會なる共通觀念中に調和せられ居るなり。之に該當して客觀界には各個人の活動が社會の中に於て相調和し居るを見るなり。所謂社會活動が相互に調和し居るとは如何なるにか。曰はく。社會活動の實質は即ち個人の行動にして此等行動が相互に補充するに由りて各個人の生存が維持せらるゝなり。我れ自ら帽を戴くと思ふは誤なり。人が之を載するなり。我れ自ら食ふと思ふは誤りなり。人我をして食はしむるなり。自ら家を作ると思ふは誤りなり。人我が爲めに作るなり。即ち樵夫、農夫等の行動は材料を供へ、大工、商估等の行動は我に直接に用立たしむ。即ち其れ等の行動は我れ一人に調和し居るなり。其餘此の類なり。之と同じく我れの行動も亦他人の生存の状態を司配しつゝあるなり。是の故に社會は現象の方面と精神の方面とを有し。何れも有機的に調和し居る者なり。然るに現象界調和の基礎原因は精神界の調和なり。而して社會は一個體な

り。

- 一、集合體の事象に應じ、各個人の意識に變動を生じ、其れより或る現象を生ず。之を社會現象と謂ふ。
 - 二、社會現象の種類數多あり。又其の活動の様式種々あり。此等に付て研究するは社會學の任務なり。
- 余は右を眼目として本書を稿せり。

本編の心理學

觀念は智識に由りて表象せられ、行爲は意志に由りて遂行せらる。故に觀念と行爲との關係は智識と意志との關係なり。然るに智識と意志とは心素に於て統一せらる。智識に感情を帯ぶると帯びざるとあり。帶ぶる者は發して意志に由りて行爲となれども、帯びざるものは行爲となることなきなり。一方より見れば意志にして智識を豫想せざる者あるなきなり。意志は目的を豫想す。目的の遂行は必ず動機即ち感情を要す。而して目的は即ち智識なり。是の故に智識と意志との關係は感情に由りて媒介せらる。意識の方面より言へば單に以上の如くなれども、之を生理の方面

より言へば少く興味あり。観念は外界より印象し來たれる者にして、其の観念が自己の生存に關係ある者なる時は神経系統の活動を惹起すると甚しく、之を主觀的に感ぜし者を感情となす。遂に運動神経に傳はりて行爲に表はる。智識の感情を帯ぶると云ふは則ち神経活動を惹起すること甚しき者なり。

智識の感情を帯ぶる者枚擧し難しと雖も本編に關係ある者を擧ぐれば一を自我の観念とし、二を他我の観念とし、三を社會の観念となす。今更此の三者に就き少く説明すべし。

自我の観念を有するは發達せる人類に在るのみ。小兒の如き者は快不快を感ずるの能力あれども、自我が快不快を感じつゝあるなることを知らず。目に視耳に聽くも、自我が之を視聽することを知らざるなり。感覺は小兒に取りては其れ自身實在にして成人に於けるが如く主觀的個人的の者にあらず。經驗を積むに及び、自我の感覺と他我の感覺とを區別し得るに至る。茲に至れば則ち他我と自我とは精神裏に観念となりて存立す。隨て社會も亦観念となりて存立す。社會に於ける自己の位置を意識する所以の基礎は此に在り。

自我、他我及び社會、此の三観念は皆な感情を伴ふ。其中、自我は比較を超へて甚だし、何んとなれば吾人が感ずる處は皆な自我の観念と聯絡すればなり。他我は(一)我に快を與ふる爲め(二)我に同情あるため、又感情を伴ふ可きなり。之と同じ理にて社會なる観念も亦た感情を伴ふべきなり。是の故に個人は自我のために活動するは勿論なるが、又他我及び社會なる観念のためにも活動するに至るべきなり。他人と我との關係が親密なる程、他人のためにすべきが如く、社會と我との關係が親密なる程、社會のためにすべきなり。換言すれば、社會の観念が明かになり、其れと自我との關係が明かなれば、則ち社會の爲めにする所以益堅かるべきなり。社會に於ける個人の位置を意識せしむる所以の必要は實に此に在り。

自我、他我、社會、此の三者の關係を明かにし、隨て個人の腦裏に三観念を明瞭に印象せんとするは實に社會學の任なり。

總論

第一章 現今の社會學の弱點

近世社會學に關する著作は實に汗牛充棟のみならずと雖ども其の言ふ處大概常識の範圍を出でざる者多きのみならず其の録する處の難駁にして指歸する處を知らざる者も亦た鮮なしとなさざるなり余をして敢て之を道はしめば從來學者の著書に由りて判斷すれば社會學は統一なき學問あり。

社會學を論ずるに當り學者の陥り易き弊竇三あり一には社會の組成を説く者二には社會の原力を説く者三には社會の心理を説く者是れなり今更一々此の弊竇を分析せんと欲す。

一、社會の組成を説く者。社會の組成を説く者曰はく類似する所多き者は相結んで社會を成すと此れ素より眞理なり然れども此の眞理たるや之を國民内に於ける都市の成立若くは團體の結合に應用すべしと雖も之を以て社會の歴史的始源を説明すべからざるなり其故何んぞや吾人の觀る處を以てすれば凡そ自然界の

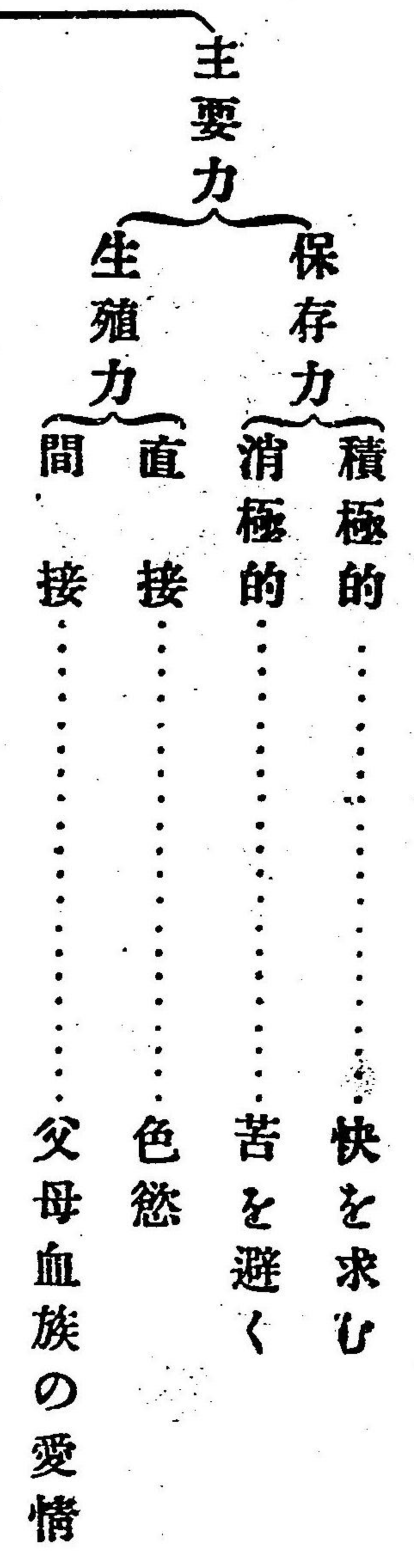
現象は皆な生存を以て目的とせる者なり而して進化論の立脚地より看れば現在生存せる者は優者なると同時に適者なり換言すれば進化論は優者適者が獨り能く生存の目的を達し得ることを證明する者なり其の所謂優者適者なる者は獨り其の體格と智識の優等なるを指すにあらずして種々の遺傳性をも亦之を指すなり即ち集合的遺傳性の如き是れなり故に力と智との弱小なる動物は必ず此の遺傳性を有し以て其の生存を維持するを得るなり自然界を歴觀すれば此の眞理を證明せざる者なきなり故に蟲類は極めて大なる集合をなし鳥類も亦集合をなし以て其の種屬を維持するもの少なからざるなり鸚鵡の如きも社會を爲されば決して其力を以て外敵に抵抗し得ずと云ふ哺乳動物に至り社會の必要は最も善く認めらる獅子虎の如き極めて猛惡なる動物にあらざるよりは大抵の動物は社會をなして生存し以て其の外來の強敵を防禦すと云ふ馬の狼を恐るゝこと甚しきも群なれば猶ほ能く其の生存を支ふと云ふ最も高等なる哺乳動物例へば猩猩狒々の如きも亦た皆な社會をなして生活することは是れダーウキン其の人の吾人に教ゆる所たり且つや現今生活せる野蠻人種の如何に劣等なる者と雖ども

亦た皆な社會をなさざる者あることなし。是に由りて之を觀れば吾人人類の祖先たる原始人類も亦た社會をなして生存せしことは否定し得可からざるなり。且つ原始人類の有せし智識感情は突如として之を收得したるにあらず、其の有形的基礎の漸次に下等動物に溯るが如くに亦過去無數の年月を経由して徐々に擴充せられたる者にして實に社會其物に由るにあざれば決して之を得る能はざりしなり。彼の狒々猩猩等の有する同情同感等の觀念が社會に由らずして如何して發達せられたるか由是觀之社會なる者は生存の必要上、生理的狀態の必要上、凡そ有情動物の自然に作爲する處の者たらずんばあらず、適當に言へば社會は人爲的現象にあらずして自然的現象なり。アリストテレスが人は政治動物 (*Zoon politikon*) なりと言へるは正さに吾人の意を得たる者なり。人は全然社會の中に埋没せる者にして社會をなさむとが又は社會を爲さざらんとかの意識ある者にあざるなり。蟻蜂が社會を爲しをるは知らずしてなしをるなり、魚の相ひ群がり居るも亦た知らずしてなし居るなり、而して人の相ひ社會をなすも亦自然にして然かる者なり。生物學上より立言すれば人は社會的遺傳性を有する者なり。是の故に吾人は信

ず、人は常に社會の生活をなして存在し、嘗て孤立の生活をなさざりしことを隨て吾人は社會を一の自然現象と見做し、以て彼の社會の生成を以て血縁人種生所等の同的意識に歸せしむる説の誤謬なるを信するなり。且つ自然界に於て同類相群せざれば何に由りて生殖の目的を達するを得んや、同類の社會をなす其の自然現象なること益、以て明かなる可きなり。

要之、社會は自然現象の一にして個人の意識を超越せる者、同類は自然に社會をなす者にして個人の意識を超越せる者なり。同的意識説は以て社會の始源を説明すべき者にあらず。

二、社會の原力を説く者、社會學者多くは曰はく、社會には社會現象を惹起する力ありと。ワードは之を以て個人の慾望なりとし、列擧して曰はく



社會力

美的力
從屬力 情力的
智力的

と(Outlines of Sociology) 即ち氏は慾望を以て社會現象を惹起する所以の原動力となし、且つ人間慾望のある丈社會現象ありとなせり、スミール及ヴェンセントも亦人間の慾望を列擧し來りて社會現象は之に由りて惹起せらるゝ者なりとせり(An Introduction to the Study of Society: Small and Vincent) 社會現象の原動力を説く者は皆大抵個人の慾望を以てせざるはなし、吾人を以て之を見るに社會現象の原力を説く者は誤れり、社會學は社會現象を論ずる學なり、故に社會現象たることをさへ知れば社會學は其の對象を得たる者なり、故に原力を説く必要は毫も之をわらざるなり、然るに世の學者、社會現象なる者を先づ把誦したりと假定し進んで其の原力を求めんとするは此れ論理を顛倒せる者にわらずや、且つ社會の原力を以て慾望なりとすれば則ち同じ論法に由りて生理現象も亦た社會現象となり了らむ、何んとな

ればウェーダーの擧げたる生殖力の如き者は生理現象とも謂ひ得可き者なればなり、論者は蓋だし言ふならむ、吾人の天性に根する慾望より出でたる行動は皆な社會に表はれ隨て社會現象と謂ふ可き者なりと、果して然らば同じ論法を以て惡疫流行し社會を荼毒せるも此れ亦社會現象と謂ふ可く地震洪水の爲め人畜の滅没あるも此れ亦社會現象なりと謂ふべきなり、果して然らば社會現象を惹起する者は何んぞ唯だに慾望のみならむや、生理力なり、物質力なり、皆な社會現象を惹起する所以の力たらざるなく、其の數枚擧す可からざるなり、要之(一)社會現象を惹起する所以の力を以て慾望なりとするは其の見解明かならず、(二)社會現象の何にたるかを知るが先きにして其力を問ふが如きは抑も末のみ、學者常に曰はく、社會現象を惹起する所以の力如何んと、然るに果して社會現象の何たるかを知れるや否や、否な、其の假定し去りたる處の社會現象なる者は何になるか、若し現象さへ明れば社會學は其にて足れり、何んぞ其力を求むるを要せんや、假りに其力ありとするも、現象は其力の知り得可き一切の方面なり、力其物を知ることとは出來得可きにあらず、力の法則は即ち現象の法則なり、若しか其物の法則と現象の法則とは異なれり

と言はいはれ、其力たるや、其現象の力に、あらずして、全く別のかならず、いば、あらず、
三、社會心意を説く者、社會學の著者、社會心意を口にせざる者、鮮なし。然るに此の
説たる殆んど皮相の見解のみ、何んとなれば、社會に一個特別の心意あるにあらざ
るとは言ふ迄もなく、所謂社會心意なるものは、社會感情又は輿論の類にして、個人
心意の複合統一せる者に外ならず、彼等が如何なる事情の下にて發達し、又た如何
なる點に於て個人のと異なるかは、等は常識ある者の容易に知り得る處なり。不幸
にして、社會學者の論ずる處は、此の如き止まる。佛蘭西のノビコウ、ルボンの如き
は、皆社會中樞(axis)なる者を説けり。此れ學者又は貴族の類にして、一世の輿望を負
へる者、彼等は此等の中樞が如何に全社會に影響するかを論述せり。然れども、其の
言ふ所、畢竟常識の範圍を脱すること能はず。此の如くなれば、則ち社會心意を論ず
るは、徒らに貴重の紙面を汚がす者と謂はざるべからず。蓋し此れ一は生物學の比
較に流るゝ者なり。即ち有機體には肉體と精神とある如く、社會にも亦肉體と精神
とありと、然れども有機體と社會と此く比較す可からざる者あり。何んぞや、有機體
は細胞の組織にして、其の組織は精神の指揮を受けずして活動しつゝある者なれ

ども、社會は精神の聯合にして、其の活動は一として、精神の一特別なる状態、即ち集
合意識の指揮を受けざる者なし。然り而して、彼の輿論の出来るも、社會感情の出来
るも、其れ自身一の社會現象にして、皆精神の一特別なる状態、即ち集合意識に根源
する者なり。故に集合意識の實現するに、隨ふて自ら發達すべし者なると、明かなり。
故に集合意識の實現さへ明かなれば、社會心意は言はずして、明かなり。由是觀之、社
會心意を論ずるは、皮相の見解たるを免れざるなり。

以上に於て吾人は、現今の社會學者の三通弊を分析せり。其の通弊の生せる所以を
分析するに、實に社會現象其物の本質を的確に認了せざるに由る。社會學を研究す
るには、先づ社會現象其物の本質を闡明するを以て第一となす。然らざれば、徒らに
岐路に彷徨し、其の目的を達する能はざるに終らむ。世の社會學者は、皆此状態に在
る者にして、社會學の著書は、愈出で愈増すと雖も、畢竟危難にして、統一なき者の
み。此時に當り、アメリカのギッデンズ氏、社會學原理を著はし、同類意識説を主張
し、以て社會現象と他の現象との區別を律せんと試みたり。恰も是れ暗夜に明光を
得たるが如く、氏自ら道へるが如く、社會學は此より正路を踏むて行くべきなり。

第二章 社會學史に於ける同類意識説の位置

ギッヂェンス氏は同類意識を以て根本始源的現象なりとなし、以爲らく、特別に社會的なりとなす可き現象は同類意識なる一の心的状態より起る現象即ち是のみと、同類意識とは氏自身の解釋によれば動物が他の動物を己れと同類なりと意識する時の意識の状態なりと、社會現象を生理現象心理現象より區別する所以の標準は即ち同類意識なり、蓋し此より先き、學者力を悉くして以て社會現象と他の現象との區別を求めたり、此に於てタルドは模倣は社會現象の特徴なりと斷言し、ドリフは契約を以て之に充てたり、デュルクハイムは究竟的社會現象は自己以外の動作思考及び感情によりて各一個人の精神が強壓せらるゝことなりとなせり、ギッヂェンクス氏則ち論究して曰く是等諸家中諸家は諸々の獨りタルド及びデュルクハイムは殆んど社會現象の眞髓たる性質を了得し、社會學の第一原理を説明して其の眞に近き者と云ふべきなり、二氏は互に相ひ誤解せり然りと雖ども公平なる讀者は二氏は少くとも至て親密に相關せる現象を各他の方面より觀察したるものなるを見む、乃ちデュルクハイムは數多の精神が一個の精神上に與ふる

印象を觀し、タルドは一人が或る一事を創するや數多の精神が模倣することを觀せしなり、兩氏の言ふ處の是等現象は縦合ひ社會關係の根源とす可からざるも亦甚だ之れに接近せる者と言ふべきなり、殊に模倣に於ては然りとなす、然りと雖も二氏の究竟的概括を承認し難き者あり、何んぞや、曰はく、二氏は殆んど成功に近かりしも社會的事實を完全に識別すること能はざりしなり、二氏の所謂定法格律に含蓄せしめし處多きに過ぐるの嫌なき能はず、多くの精神又は他の一精神が一精神の上になせる印象にして發達して集合せんとする動機とならざる者あり、或は模倣にして毫も社會的萌芽を包藏せざる者あり、例せば蛇は鳥の精神に恐怖の念を印象し、而かも殘害忽ち之に隨ふ、キヤットバードは知更雀の音を模倣すれども然れども社會的目的を以てするにわらず、是に由て之を觀れば根本的事實は印象と模倣とに密接なる關係を有することは疑ふ可からずと雖ども、模倣又は印象其物にあらざるなり、論じて茲に到れば社會學の公準は左の事實より他なるを得ず、曰はく、社會の根源たる主觀的事實は同類意識なりと、ギッヂェンクス氏は此の如くして同類意識より興る現象を以て社會的となせり、氏の此の説たる大に學者の

攻撃を被りしと雖ども決して没却すべき者にあらず其れのみならず最も明白にして最も傾聴すべき價值ある者なり其の大意を擧ぐれば實に左の二觀念を合攝せり曰はく社會現象は心的なること曰はく社會現象の起る前には精神内に自他の觀念あること此の二點に於てギッヂング氏は實に善く社會現象の本質を摘出せり

然るに余ギッヂング氏に於て猶ほ慊焉たる者あり何んぞや曰はくギッヂング氏の同類意識の觀念中に自他の觀念あり隨て社會的の觀念なりと雖ども社會の觀念あることなきなり自他の觀念は猶ほ未だ社會の觀念ならず故に自他の觀念より出る行爲は猶ほ未だ社會現象たるを得ざるなり然れどもギッヂング氏の思想の方向を踪蹤すれば實に左の如くならざるを得ず曰はく自他の觀念の代りに猶ほ更に一層廣き處の社會の觀念より起るもの即ち此れ社會現象なりと今ま吾人は社會現象の性質を詳論せむと欲す

第三章 社會現象

社會現象は社會なる結合體内に起る一切の現象を意味するにあらず社會を基と

し個人を通じて起る現象が即ち社會現象なり個人より言へば社會あるが爲めに起れる現象が即ち是れ社會現象なり更に換言すれば社會を客觀的の原因とし個人を通じて起る現象が即ち社會現象なり此の社會現象の性質を分析すれば左の如し(一)社會現象は心的なること(二)社會現象たるには個人の動機が社會なること是の故に縦ひ一人のなす所なりと雖ども其の動機を社會に有すれば則ち吾人は之を社會現象と謂ふを憚らず例へば此に一人の自殺者ありとせむ數より言へば僅かに一なり然れども其の淵源が實際社會のたみに起るものなれば則ち之を社會現象と謂ふ可きなり若し然らずして自殺者が自ら作れる人世觀より自殺を企てし場合の如きは之を個人現象と謂ふ可きのみ社會現象は心理現象生理現象と同列する者にして自ら差別あるものなり社會に淵源を有せざる者は決して社會現象にあらざるなり更に一例を以てせむに狂者の數の遽かに増加したる時の如き此れ必ずしも社會現象となすに足らず若し狂者が寒胃の結果なりとすれば狂者は如何に多數なりとも畢竟生理的的心理的現象たるのみ然るに若し狂者が社會の事狀に淵源を有するものなれば此れ社會現象なりと謂はざる可からず蓋し社

會現象の種類は之を二大部に分つを得べし。

一 社會に出で、個人に終る

二 社會に出で、社會に終る

イ 社會を破るもの

ロ 社會を助るもの

(一) 恒久的

(二) 一時的

第一の例は社會の情勢に感じて自殺し慷慨し敢て社會に向て事業をなさざる者なり。第二の例は犯罪謀反革命の類是なり。同ロ(一)は即ち機用的團體にして同(二)の例は社會内の突然の事變に應じて生ぜざる者なり。此の故に社會現象なる者は社會に淵源を有する者ならざる可からず。此に於て社會現象は其の統一を得且つ他種の現象と天然區別せらるべきなり。ギンゲンズ氏は同類意識を以て社會現象の特徴なりとせしに對し余は集合意識を以て社會現象の特徴となすなり。ギンゲンズ氏は同類意識を以て社會の生成より其他一切の現象を解釋せむと擬せし

が余が集合意識は此く迄廣く適用すること能はず。單に社會現象の眞性を觀破したるに止まる。然るに純粹理論の上より言へば同類意識より起る現象が如何なる意味に於て社會現象と云はるゝか是れ甚だ解すべからざる所に屬す故に吾人は社會現象は社會より起る者即ち社會を動機として起る者更に換言すれば社會あるが爲めに起る者なりと言ふの勝るに如かざるを信するなり。ギンゲンズ氏が社會現象の統一なることを屢口にせしは余をして前述の理論をなさしむる所以の一因なりき。

終りに臨むで一言すべきは集合意識其物の性質なり。所謂集合意識とは各個人が有する社會觀念なり。社會は精神の聯合なれども肉體の方面あり。社會觀念の中に個人個人の精神状態並びに肉體状態を含む者なり。勿論此の觀念には明と不明とあり。殊に野蠻人の或る者は殆んど社會の觀念なかるべく。開化國と雖ども婦女子は猶ほ社會の一部のみを意識し居るは目づらしからざるなり。實に全社會の觀念を有する者は殆んど是れなかるべきなり。

社會現象の起らむとするや必ずしも集合意識のみが唯一の動機にあらず。種々の

二〇
動機が之に交又すべきなり。例へば一の社會事業を起さんとするも自己の利益自己の名譽が猛烈なる動機たること常に見る所なり。又は犯罪人の多きも社會の狀態が之をして然らしむるのみにあらず。一は罪人の性質上此に至ることは豫想せざる可からざるなり。

第四章 社會學の體系

社會學は幼稚なる學問なり。故に諸家の體系大に一致すること能はず。専ら社會の心理を論せる者若くは専ら社會の理想を論せる者の如きは是れ一偏を伺ひたるのみにして未だ社會學の系統となすに足らざるなり。社會學の創設者たるコムトは社會學を分ちて靜學と動學となせり。ウアードも亦た此の思想を受けて曰はく社會動學は繼起の定律を究め社會靜學は俱在の定律を究む。社會の構造及び機用を研究するは靜學にして社會の進動を研究する者は動學なりと。ギンゲンクス氏は社會學の問題を類別して一次的及二次的となし、一次的は社會の造構及び成長を論ずる者とし、二次的は社會の進動法則及び原因を論ずる者となせり。其の言ふ所尤も穩當なるが如し。然るに社會は自然現象の一なるを以て之を研究するに當

り先づ第一に區別を立つ可きは社會を外部より全體一團として觀察すると之を内部より個々の社會現象に付いて研究するとの兩方面に分つを以て最も顯著なる分類法となす。此の分類法に従ひて以て社會學の體系は建設せられざる可からざるなり。

進化論は生物が如何に外圍と相ひ適應競争して以て其の體格構造を變遷進化せしむるやを論ず。社會が社會全體として其の外圍に對し如何に相ひ適應し如何に變形するやを研究するは則ち進化論の一部なりと謂はざる可からず。スペンサーの社會學は進化論の立脚地より社會を解釋せる者にして其功績は萬古易ふ可からざる所に屬す。然るに一方に於ては社會の内部に立ち入りて其の構造と性質とを研究せざるべからざるなり。前者は進化論の一部なれども其の問題廣大にして到底一科學者の知了し得べき所にあらざるが故に之を社會學者に委任するも可なり。名けて社會進化論と謂ふ可く後者は社會の内部より見たる者なる故に社會本質論と命名すべし。

本論 一

序言 集合意識實現の法則

社會は個人の集合なり。個人に生死ありと雖ども、社會は依然として數十百年に亙りて其の生活を持続す。社會は一個の生活なり。此の生活の途中に於て、必然的に伴ふ可き結果は、

- 一 集合意識の實現すること
- 二 社會を動機とする事業の増加すること
- 三 社會が牢固なること

是れなり。若し夫れ社會に進歩すると否とあるは此れ人民其物の性質に在ることにして或る人種は著く發達の性能を有し、他の人種は之を有せざるなり。人或は言はむ野蠻人の小兒と雖ども之を開化人の中に入れて養育すれば其の發達や必ず開化人の小兒と撰ぶ所なし。人種に開化すると否とあるとは恐くは否ならむと然れども歐亞の優等なる人種と同く長年月の間を生活し了りながら猶ほ未開野蠻

の有様に在る所の人種あるにわらずや、氣候外圍が人間の進化に影響することは萬疑ふ可からずと雖ども印度の如き不便なる氣候の下に在りし人種が如何に高等の開化に達せしやを思はば必ず氣候に由りてのみ説明すること能はざるべし。殘る所は唯だ之を人種固有の性能に歸するに在るのみ。蓋し人間は一種なりしか多種なりしか知り易からずと雖ども我が觀る所に據れば人種は一にして其の淵源地は數個なりし如し。然るに地面に存在せる一切の人種は必ず此の數個の淵源地より岐れ來りし者の如し其の岐れ來たるは偶然の事情に由るならむ。其の岐れたる始祖は必ず多少精神の特質及び肉體の特質を有せり。此れ等の特質が相ひ遺傳し來たりて以て其の人種の精神並びに肉體の特質をなすに至る。此に於てか或る人種は忍耐力強けれども他の人種は弱く、或る者は敏捷なれども他の者は遲鈍なり。肉體を以て言へば丈長さあり、短さあり、太さあり、細さあり。毛髮に直なるあり、縞せるあり。人種の特質は種々様々なり。是の故に人種に固有の性能あることは疑ふ可からざるなり。熱帶の地は人をして怠惰ならしめ、濕地は人をして虚弱ならしめ、氷凍の地は戶外

の事業を企つるを許さず、美麗なる風光は人をして優美ならしめ、温清なる氣候は人をして輕快ならしむ。外圍の人心人體に及ぼす影響は今之を言ふを須たざるなり。

此くして人種には固有の性能あり。此の外に此の性能に影響する所の外圍あり。外圍と性能との相互作用の如何んによりて各人種のなせる社會の進歩と否とは決定せらる。是の故に社會の進歩は意識的努力の外に之を規定する所の條件あり。歐米の人が如何に奮發盡力するも決して支那の開化を得ること能はず。彼の蠻人の兒を取りて之を開化人の中に成長せしめ、其の發達に於て開化人の小兒と異なる所なきが如きは、此れ外圍の影響に由るものにして當然のことなりと雖ども、猶ほ蠻人固有の性能を變化せむことは到底能くし得可からざるなり。

此の故に社會の進歩すると否とは別問題とし、兎に角社會なる生活が永續する時は以上述べたる三種の進歩の行はるゝことは疑ふ可からざるなり。之れに付き少しく説明す可し。

第一、社會の個人は皆な社會なる集合體の觀念を有す。其の初めは頗る漠然たれ

ども、其の後漸く明了に映ずる様になる。野蠻人の如きは殆んど此の觀念なき者多し。更に下て蟻蜂の如きは皆な社會なる觀念を有することなきなり。社會の構造の如何んは茲に之を論せず。世の開化するに隨ひ、各所の交通漸く頻繁を加へ、新聞雜誌の類は全社會の状態を各個人に報知するより、茲に社會なる觀念は各個人の精神内に漸く實現せらるゝことを得るなり。漸く實現せらるゝに隨ひ、社會なる觀念が漸く個人を影響するに至る。佛蘭西の學者が社會中樞(centre)を説くは即ち此の社會觀念の實現せられたる人を指すなり。此の如き人は善く社會の構造や社會の事情を知悉せるの人なり。其の行動するや、社會の爲めに社會を云爲せむと欲す。社會を胸中に書き、其の如何なる部分を變化せむとして行動す。苟も各個人が此の如くなる時は、即ち社會は各人執意の上に立てる者なりと謂ふべきなり。執意は實に理想的社會の基礎なり。

第二、此の如く社會の觀念が漸く實現するが故に社會現象は漸く増加し、社會事業は漸く増加す。野蠻人は社會の觀念極めて粗雑なり。故に之れより生ずる現象は極めて小なれども、開化人は社會には如何なる慾望が潜伏するか、又如何なる缺點

が生ず可きかを治く洞察するが故に社會現象の數も亦た多からざるを得ざるなり。即ち社會が開化するに隨ふて其の現象複雑なり。

第三、社會の觀念が漸く明了に實現せらるゝ時は各個人共通の點を意識すること益多く共に生活するの必要を感ずること愈強し茲に於て社會は牢固なる結合を得蓋し人類は自然に社會をなすものなりと雖ども彼の野蠻人の社會の如きは其の組織極めて簡單にして自由に其の一部は離れ去りて以て獨立なる一の社會を成すに至る。然かも善く生存の目的を達し得るなり。恰も最下等なる元形質の一塊は之を二分し三分するも猶ほ其の生存を持續し得るが如し然るに開化發達せる社會に在りては人は其の社會を離れ去るを難んず。此れ共通の點を意識すること愈多きを以てなり。此を以て開化せる社會の結合は牢固なり。

以上論ずる所の如くなるが故に社會の進歩に伴ふて社會の觀念は明了に實現せられ結合は牢固になり而して社會現象は漸く其の數を増加するに至る而して社會現象は重んじ社會の慾望を満足せしめ社會の安全を保護するためのみ盡力するに至る。換言すれば社會の貴ぶ所は階級にあらずして必要なり國家に必要なり。

る者が獨り貴ばれ必要なる者が獨り重せらる。社會學の語を以て言へば社會的價値の存する所は社會の必要を満足せしむる行動是れのみ之を稱して社會の民事的進歩となす。

以上吾人は社會の自然進動を論述せり是れより進んで社會進化論を論述せむと欲す。

第一章 社會進化論

社會進化論は社會を全體より見て其が外圍と接觸して如何に其の形體性質を變化するやを論述する者なり。而かも此章は固より精密周到に之を記述せむとするにあらず。唯だ余が意見の在る所を明示するに必要なる範圍内に於て之を記述せんと試むるのみ。然れども其の變遷の要點は之を提舉して以て漏らさざらんことを期す。

余は第一章に於て社會は自然現象なることを論じ之を以て人為現象と見做す可からざる所以を論せり。然れども未だ足らざる所あり。則ち此に論究し悉くさんと欲す。社會を以て自然現象となす所以は

- 一、自然の進動上同類は社會をなすべきこと
- 二、原始社會は生成せられし者にあらざること
- 三、個人の性質上必然的に社會を爲す可きこと等の故を以てなり。

進化論上原始人類は更に下等動物より進化し來たりたる者にして此れ等下等動物即ち猿狒々狸々等の類は皆な社會をなして生存し、ダーウキンンの所謂社會的遺傳性なる者を有せり、更に下等なる哺乳動物を見るに彼等は大概社會をなして生活せり、狐狸の群、馬の群、栗鼠の群皆な社會にあらざるなきなり、南亞米利加に産するペイリー犬は平野の上に各、一の穴を穿て生活し以て一の廣大なる社會を爲す、極狐の如き海狸の如き哺乳動物のなせる社會の例として有名なる者なり、哺乳動物は概して社會をなすと謂ふべきなり、彼等は皆な所謂社會的遺傳性なる者を有す、然り而して原始人類が哺乳動物の如き動物と相去る遠からざりしとせば、彼等も亦原始人類とならざる以前よりなし來たれる社會内に於て生活せしことは疑ふ可くもあらざるなり、則ち社會は自然現象にし、そののみ彼等が已に自然

現象たる社會に於て生活する以後は彼等は漸く社會的天性を生じ、社會を以て快樂なりと感ずるに至る。

以上論ずる所は實に社會の自然進動にして其の事實なることは何人と雖ども疑ふべからざる所なり、果して然りとすれば則ち原始人類並びに哺乳動物は皆な社會的天性を有し、此の天性を活動せしむるは彼等に快なる所以故に、彼等は此の快樂に追はれ無意識的に社會をなすに至る、恰かも美味に向ひては情慾の猛烈なるがため無意識的に此の物を取らむとするが如し、凡そ自然の物象は皆な其の適當なる位置に返へらざるを得ず、滔々たる天地の進動は其の位置に適當せざる物を排去し之をして其の處に適歸せしむ、譬へば河水の流れて海に入るや其の口に於て砂を堆積し以てデルタを成すが如し、上流より水の激流に打ち流されて此の處に堆積するなり、此の處は即ち砂子の堆在に適當なる所なればなり、又霜葉の風に翻へざるを見るに地面上一處は他處より密に堆積す、此れ又霜葉の堆積に適當する所なればなり、水を滿たる瓶中に砂粉を入れ之を振蕩する時は砂粉は中央部に沈殿するを見、中央部は水の回轉勢に觸れざる所なればなり、此れと同じく宇宙

の進動も一の勢ひにして日夜止まず。或は山を崩し、或は水を溢らしめ、或は氣候を酷熱にし、或は地面を瘦乏ならしむ。此の如き進動に遭遇し、其の位置を避くる能はざる者は死滅に歸し、避け得る者は之を避く。然るに同類には同一の場所が適當するが故に同一所に集らざるを得ざるなり。此れ蓋し動物の集合的天性の生ずる所以なり。彼の蚊虻が夕方地上を距ること五六間の所に於て群飛せるが如き、小魚が淺水に群集せるが如き、其の適例なり。而して哺乳動物が社會をなすも亦實に此の集合的天性の漸く遺傳し來たれる者に外ならざるなり。

因みに云ふ、同類が相集合するは必ずしも以上の原因のみにはあらず。彼等は生殖が目的なる故、自然淘汰が自ら此の如き習慣を作りしなるべし。即ち社會ならざれば生活すること能はざるなり。此の故に現今各動物各人種が同類相ひ社會をなすは一方には自然的進動によりて集合せざるを得ざるに至り、一方には自然淘汰に由りて作られし遺傳性に由りて然るなり。少しにても類を異にする者は縦ひ第一の自然的進動にのみは適し得るも、第二の自然淘汰には適し得ざるなり。

社會は自然現象の一にして、其の始めは蓋し極めて雜駁なる者なり。無組織無體制

の狀態なり。其の中に於いて先づ最も顯著なる態相は夫婦の關係の比較的に定まり居ること是れなり。雌雄の情は蓋し一切動物の有する最も強固なる者にして、雄は某雌を己れの專占として、其の雌は其の雄を己れの專占となさんと欲す。故に一夫一婦の制は彼の鳥類の間に於いても行はるゝを見るなり。鶯、鴛鴦の如きは其の適例なり。故に動物學者屢々嘆稱して、真正なる結婚は獨り鳥類の中にのみ之れありとなす。人類學者の言ふ所を聞くに、雌雄の一群の鶏中に、多少一夫一婦の關係あるを認むと言ふ。哺乳動物に至りては此の關係は稍異なれり。一群の象若しくは一群の馬には必らず雄之が長たり。此れ雄が嫉妬の餘まり、他の雄を容れざるなり。彼の猩猩の類は交尾の期に至れば一雌一雄相共に生活し、雌は樹上に棲し、雄は其の下に在りて外寇を防禦し、又は食物を供給し、出生後少時を経て、其の場を去ると言ふ。フインランドのウエステルマルク氏は人類學者として有名なる者なるが、近來婚姻歴史なる書を著はし、其の中に云へるあり。曰はく、古代の人種には交接の期節ありしと。果して然りとすれば、所謂原始人類なる者は猩猩の類を去ること遠からずして、其の平常社會をなして雜居するにも拘はらず、比較的短期なる夫婦の關係を

維持せしことは推測するに難からざるなり。夫。婦。の。關。係。は。短。期。な。り。故。に。大。體。よ。り。見。れ。ば。雜。婚。の。有。様。に。在。り。し。な。り。然。れ。ど。も。社。會。的。生。活。に。於。て。智。識。が。進。歩。し。感。情。も。發。達。す。る。に。隨。ひ。夫。婦。の。情。慾。も。亦。た。漸。く。強。烈。を。増。し。母。の。子。を。養。ふ。性。は。動。物。界。に。在。り。て。は。殆。ん。ど。遺。傳。的。不。感。情。的。な。れ。ど。も。茲。に。至。り。て。漸。く。感。情。的。に。な。り。母。子。の。愛。が。發。達。し。母。及。び。其。の。子。よ。り。成。る。所。の。家。族。は。追。々。永。續。的。に。な。る。此。く。し。て。無。組。織。な。る。社。會。内。に。漸。く。家。族。の。形。式。見。は。る。然。る。に。子。供。は。成。長。す。れ。ば。隨。意。に。離。散。す。べ。き。な。り。此。の。故。に。此。の。如。き。原。始。社。會。の。單。位。は。家。族。な。り。と。謂。ふ。べ。か。ら。ざる。な。り。唯。だ。群。中。に。在。り。て。漸。次。に。其。の。社。會。的。天。性。を。發。達。し。智。識。を。増。積。し。成。育。の。時。期。も。長。く。な。り。隨。て。父。の。保。護。も。永。か。ら。ざる。可。か。ら。ず。此。に。於。て。家。族。的。社。會。は。漸。く。固。定。的。に。な。ら。む。と。す。子。は。己。れ。の。母。を。知。り。て。其。の。周。圍。に。集。ま。る。べ。し。母。を。知。り。て。父。を。知。ら。ざ。る。未。開。人。種。中。に。在。り。て。母。權。の。強。き。所。以。は。此。く。諸。子。の。勢。力。を。得。れ。ば。な。り。茲。に。下。等。動。物。よ。り。人。類。を。通。じ。て。一。の。奇。な。る。癖。あ。り。何。ん。ぞ。や。彼。等。は。近。親。結。婚。を。避。く。る。こ。と。是。な。り。動。物。は。其。同。巢。者。と。交。尾。す。る。を。忌。み。原。始。人。類。は。其。の。同。棲。者。と。結。婚。

することを惡む。故に母の下に集まり居る一群の男女は其の間に於いて結婚することを成さず。去つて他の團體に行き、其の女と結婚すべし。或は女は奪はれて他の團體に行き、其處に結婚すべきなり。此くする間に一群内の家族團體は互に血縁ある者となる。

原始人類は皆保護神を假定す。例令へば草木の一群又は動物の一群是れなり。而して其の動物又は植物と深き關係を有する者なりと自信す。今ま此く血縁ある一群内に此の如きは必ず一致する者あるべし。然る時は彼等は此の動物若くは植物を以て其の一群の保護神となし、一群も皆な此の保護神より降生せる者なりとなす。而して當時血縁を踪蹤するには母を通ずるが故に其の保護神を以て女性なりとなすなり。此く一の保護神の下に連絡せる一群を名けて族となす。保護神の名は即ち族の名なり。族は即ち支那の姓にして支那には古へ萬姓の稱ありき。則ち數多の族ありしなり。

吾人は社會を以て自然現象となし其の中に家族が分化し更に族が發達すとなせるが故に族は家族より發達せし者なりとの説を排斥せず。いはわらず。然かれども

群と族とは範圍を一致すと謂ふ可からず族は群の一部なるとあるべきなり。或は一群は數多の族に屬する人を含ひことも亦た之あり得べきなり。何んとなれば同棲者と結婚せざると云ふ論法より推して同族の人と結婚せざるべきは見易き所なる故一族の人は必ず他族の人と結婚すればなり。支那に同姓は婚せずとの禮あり。是れ或は聖人の制作せし所なりと云ふ者ありと雖も其の實は然らず。習慣其の物を擧げて以て禮となしたるなり。

族の生せし後に至りて結婚は異族間に行はる。其の様式種々あり。或は夫が妻の家に行きて生活し、子は妻の有に歸する者あり。或は妻を奪つて之を自己の家へ携へ歸る者あり。小兒を養育するに婦人の必用なるは云ふ迄もなく、男子が食物を得若くは危害を防禦するに必要なりと感せらるゝに至る頃茲に夫婦的家族は比較的永續的になり、而して血統は父を通じて踪蹤せらるゝに至る。之を父系的族と謂ひ以て前の母系的族に別つ。現今母系的族より父系的族に遷移しつゝあるものあり。族が公寇又は災害に逢ふ時は結合し以て部族をなす。部族には長あり、最も優力なる族の長が直ちに部族の長となるか又は智勇兼備に由りて推薦せらるゝ者なり。

所謂大和民族は一の部族にして皇室は其の中最も優勢なる族の長なりしなり。故に日本を一姓と云ふも其の實は一姓にあらざるなり。即ち日本臣民悉くは皇室の末裔にあらざるなり。堯舜は支那の聖天子なり。史に稱す。天下の諸侯之を推薦して以て王となすと。即ち堯舜は推薦せられて部族の長となりし者なり。

部族は全體より見れば戰爭的なり。其の社會組織は軍事的なり。此れ社會開發時代の自ら然かる所なり。族と雖も群と雖も亦た公寇に對して争はざるにあらざり。其の組織未だ不完全にして戰爭をなす程に團體は未だ發達し居らざるなり。グムプロウツ白は社會的戰爭を爲すには團體強固ならざる可からずと。部族の時に至れば團結の觀念を生じ、奮闘も發達す。此に於いてか部族は一般に戰爭的なり。部族の長は其の族兵を引いて他の部族を攻撃し之を征服して以て己に貢獻せしむ。被征服者は奴隸となり、勞働者となる。部族の長は坐して内外の貢獻を受け、而して封建の王の如し。部族の合同するや、或は征服なることあり。或は合同なることあり。何れにしても生せし者は即ち民族なり。部族の長は此に於いて民族の長となる。民族併ひに部族内に於いて家族の形式は漸く進歩し永續的になる。其の一夫多妻なる

か多夫一妻なるかは經濟上の條件に隨て同からざるなり。即ち土地の豊饒なる食物の獲易き地には多妻一夫が行はれ、土地瘦せ食物貧なる所には一妻多夫が行はる。西蔵の如き是れなり。部族には母系的と父系的との別あり。然れども其が既に民族となりし後は父系的となりざるもの殆んど少なし。然れども此れなきにあらず。即ち埃及のハラフ第三世の時埃及には父を遺せず母を通じて血統を踪跡せりと云ふ。同族相ひ結婚せざるの習慣は民族をなして後も猶ほ之を存す。即ち支那日本に於いて同姓婚せざるの習慣を見るべきなり。

民族をなす所の群族部族を成す所の族は大抵同一人種に屬する者なり。其の然る所以は同一地方は大抵同一の祖先より降りしものなること及び人種が甚だしく異なる時は他を壓服すること甚だしく之をして根絶せしむること、に由るなり。民族は已に一の長の下に結合し、一定の州土を占領し、言語、人種を一にし漸く交通の機關を開き、行政組織の完成と共に此に一の國民を成す。

然るに國民成形の始めに當りては内は内部の統一に力を用ひ、外は外敵の防禦に繁なり。此に於いて一般の傾向は軍事的なり。現今地球上に成立せる國民は皆な此

いして生成せられたる者なり。

國民には王あり之を統一す。然れども本と多數部族の集りて成立したる者故純粹の統一を得むは實に難たし。其の間に所謂部族的感情あり、階級的感情あり、智識の進歩と共に人は漸く自由を愛し、又物質的幸福を享受せむと欲す。此の如くなるに及び外國との戦争は彼等を一致せしむるには最も都合好き機會を與ふる者なり。人民は大國民なる觀念を有し、唯だ此の一念が彼等の行爲を影響し、業に既に軍事のみが唯一の志望たらざるに至り、諸種の慾望は漸く開展し來たり、實業は漸く頻繁に赴くべし。此に於いて社會一般の傾向は實業的となる。實業盛んにして富みの程度を高ふし、稍斯生の幸福を得るに及びて學問其の物を好愛することとなり。時勢は漸く學問的になる。然りと雖も軍事實業及び學問斯の三傾向は國民的社會には常に潛伏し居る者にして唯だ顯著なると否とあるのみ。時に應じ或は軍事的となり或は實業的となる。日本も日清戦争以後は重きに軍事的なりしが又漸く實業的ならむとす。歐洲如何なる國と雖も皆な然らざることをなし。彼の英米の如きは重きに實業的なりと雖も元より軍事的の方面なきにあらざるなり。唯だ國民成形の

始めは軍事的にして其後實業的學問的になることは疑ふ可からざるなり。此くして社會は今日の開化せる社會に至る迄には種々の歷程を經過し、又其の態相を變遷せり。社會進化論の目的とする所は則ち此の底のことを語らむとする者然りと雖も此れ唯だ大略を述ぶるのみ、余が主意とする所は此の如き社會進化論は廣義の進化論の一部たれども其の餘より廣さがために社會學の論及すべき所なりと云ふに在り、實に社會が外圍に應じ内部の必用に逼まられ種々に其の狀態を變遷するは恰も一匹の動物が其の初生の當時より種々に其の狀態を變じながら其の内部の構造を完全にするに等し。

第二章 社會本質論

第一節 社會組織論

社會は人間の集合なり、人間の集合は人間の有する丈の慾望あるは云ふ迄もなし、此れ等の慾望を満足せしむる所以の者なかるべからず、始め社會の個人は自由に自己の衣食を得たりしが漸く分業を生じ來たれり、分業は決して自然に生じ來たれる者にあらずして社會現象として生じ來たれる者なり、即ち彼等は某の仕事に

適するが故に某の仕事のみをなして以て一般人を養ひ、我は某の業に適するが故に此の業をなして以て一般人を養はむと、此の如き思考は家族に於いては起り易き者なり、即ち男子は勞働に適し、女子は小業に適する故に自ら家族内に分業の行はるゝことあり、又家族の生せざる以前群の中の於いても或る男子は敏捷なれども他の者は猛勇なり、一の共同生活をなす上に於いて其れ等特質に相應せる所の業務あり、彼等は他人に相應せる業務は之を他人に譲り、己は其の恩澤に與らむと欲し、己は己に適する任務を取りて以て他人をして我が恩澤に與らしめんと欲す、此くして社會の分業的業務は社會現象として生ずる者なり、換言すれば社會を動機として生せる者なり、最も分業の始めは人類社會に起るにあらずして更に下等動物の社會に溯る者なり、即ち蟻蜂の中にも鳥群の中にも哺乳動物の中にも亦た是れあり、彼等は決して社會を動機として起これるにあらず、進化の進動に由り自然淘汰の吟味を経て達せ得られたる者なり、此の如き者は以て社會現象となす可からず、而して其の群を以て社會となす可からざるなり、漸く高尚にして人類に至るに隨ひ智識あり、慾望あり、故に専ら無意識的に分業するにはあらずして意識的

に分業するなることは疑ふ可からず。是の故に男女の分業は略ぼ一定し居るも時として女をして己れの業をなさしめ、或は男をして之に代らしむることあるべきなり。

此くして下等動物より高等動物に至るに随ひ漸く意識的に分業を試みるに至る。即ち社會を動機として分業するに至る。社會は分業に由て支持せらるゝ者なり。分業は即ち社會の機用にして此の機用の數を列擧すれば

- 一 制御的
- 二 實業的
- 三 科學的
- 四 教育的
- 五 娛樂的

其の他一二種あり。是れ等は皆な活動なり。即ち個人の業務上の行動にして社會の必要を満足しつゝある者なり。但だ此れ等機用は或は個人にて成遂せられ、或は團體に由りて成遂せらる。前者は集合意識より直ちに行爲に表はるゝと雖も後者は

複雑の手段を経由する者なり。即ち數多の個人が相互に反動して以て一の團體組織を爲すを得るなり。故に此の方面より見れば社會現象に單純と複合との二あるを知るべきなり。然れども其の集合意識に出るや則ち一なり。

制禦的機用は即ち司配的機用にして社會内の個人を外は公敵に對し、内は私人に對して保護せむとする者なり。此の機用を代表する者は社會の主權者なり。機用は即ち主權にして代表者は即ち主權者なり。機用をして完全ならしむる者は權力なり。之を譬ふれば主權は機關にして主權者は機關師なり。而して油炭鐵道等は權力なり。主權は已に機關なり。故に此の機用に反對するは自家撞着なり。然り而して主權が人民に在りとか、又は君主に在りとか云ふは感情の論、又は國體の論なり。族に長あり、部族にも亦長あり。長は自己の利己的意志に由りて事を行ふが故に社會の此の機關を完全に果たすこと能はず。人民は常に長と軋轢す。國民の王も亦た此の機用に當たる者なれども彼れ亦た自己の利益をのみ謀りて人民の疾苦を知らず。此に於て人民の怨聲は常に絶つことなきなり。然るに世の開化に随ひ王の責任は果たして何んぞやの疑問起れり。王は斯の民を保護する者なり。王は社會の制禦的

機用を代表するものなりとの解答を與へ王の個人的自利的弊害を避けんため國民の安寧幸福を定むるに必要なる所以の大法則を規定す此れ等大法則は則ち制禦的機用の由るべき大法則にして其の體系を名けて憲法となす故に憲法なる者は獨り王の聲ならず又獨り人民の聲ならず王と人民との聲なり換言すれば社會自然の聲なり然るに實際に憲法を制定するは此れ主權者の手を藉らざるを得ず主權者は憲法を制定し得たればとて之を變更し得るにあらず已に憲法を制定したる以上は之を變更するは憲法に従て行はざる可からず若し然らずせば憲法なきの國なり主權者は憲法制定以後は憲法の中に在る者なり即ち憲法に由りて主權を保持する者なり主權者が憲法の規定する所に隨て憲法を變更するは此れ主權者は憲法の聲に順て行動したるなり即ち主權者は社會の聲に順て行動したるなり若し然らずして自由に憲法を變更し人民が之を默許するが如きは此れ憲法なきの國なり專政君主國なり

實業的機用は即ち社會の物質的需要を満足せむといひ起る者にして其れにも亦た種々あり年を経るに従て漸く其の數を増加す如何なる社會と雖ども此機用

のあらざる者なきなり此の機用は或は團體に由りて成遂せられ或は個人に由りて成遂せらる此れ等現象は本より經濟現象なり其が社會の必要に逼まられ社會を動機として爲されたりといひ見る時は則ち社會現象なり社會の狀態に従て變動する者なり故に其の變動は即ち社會の狀態變動の標徴なり

人間皆な智識慾あり宇宙の秘奥を探ぐらむと欲す此の如き慾望を満足せむとするもの之を科學的機用となす此の機用に該當する社會現象は其の類極めて多し如何なる社會の狀態の時に如何なる現象が起るかを研究するは社會學者の任なり科學的機用を大別すれば三種あり一を神學的となし二を形而上學的となし三を科學的となす神學的機用は草昧なる時に多し即ち草昧の人種は迷信強く萬物を崇拜して以て神となし所謂神話なる者を聴き信じて之を好愛すトテム崇拝の如きも其の一例なり社會の此の迷信的方面を満足せしめんと欲し茲に機用的團體を生ず彼の部族に於けるフラトリの如きは其の適例なり其の餘部族の僧侶の如きは社會の此の機用に當らんとするものなり然るに信仰なる者は人を動かさしむる力あるものなるを以て僧侶の權力甚だ強く大概は王が僧侶を兼ねたり此

れ所謂神政時代なり。然かるに社會の進歩と共に信仰よりは寧ろ智識に重きを措き茲に形而上的探究の傾向を生ず。然れども此れ個人的に此の如き探案をなすにはあらずして社會の狀態變遷の結果なり。其の後社會が實業に傾くに及び科學的研究は社會の發達を計るに必要なるが爲めにして起る。然るに社會の個人は教育せらるゝにあらざれば、則ち完全なる一人となる。能はず。此に於いて所謂教育的機能あり。其の種類を列擧すれば家庭教育、學校教育、社會教育、實業教育の如き是れなり。

倫理は社會の個人間に自然に發生する所の習慣なり。譬へて言はゞ軟體相互の衝突より生ずる形式なり。共同生活内の個人が各利己主義を以て衝突し、其の目的を達するがために必要なる方法として生じたる一の社會現象なり。

余は社會を以て自然現象と見做すが故に其間に何分か倫理の自然に存在するとは之を信ず。然れども個人の利己的感情は猶ほ脱却せず。此の感情衝突の結果として種々の倫理が伴生するなり。

然るに倫理を提し若しくは新倫理を作らむとして所謂機用的團體を作るに至り。

茲に新しき社會現象の發生を見るなり。倫理教育、倫理制定を目的とせる一切の機用的團體、學校、矯風會、教誨奉讀式の如き是れなり。支那上世の聖人が倫理を制作せしも亦た一の社會現象なり。

宗教は其の淵源を純粹心理に有する者にして其れ自身としては何等の社會現象にあらざるなり。宗教の始めは已に野猿に在りと云ふ。野猿が樹上に在りて旭日を拜むは宗教的意味ある者なり。野蠻人は凡そ活動する者は之を活動せしむる者あるべしと信と之を崇拜し、酋長に對すると同じ考へにて之に歸敬し以て已に禍を降し禍を來たさむとを希ふ。此の故に宗教は其の淵源を純粹心理に有すと謂ふべきなり。其の後宗教を擴張せむとする者あり。改良せむとする者あり。又は撲滅せむとする者あり。此に於いて始めて宗教的社會現象あり。此の故に如何に多數の人が宗教を信すればとて其は社會現象にあらず。恰も疫病の流行に由りて死亡者の多きと同じ。但だ宗教の傳播が社會に其の淵源を有する時は則ち然らず。例へば支那中古時代に佛老の流行せしは社會に戰亂絶えず斯生の望みなきを以て已むを得ず佛老に歸敬せしなり。故に社會に淵源を有し、隨て社會現象と謂ふべきなり。

宗教が人心を鼓動し社會を治め社會を亂だすに極めて重要な關係を有するを以て宗教的社會現象なる者は何れの國何れの時と雖も絶ゆるとなきなり其の現象の種類を大別すれば(一)宗教を擴張せむとする者(二)宗教を利用せんとする者(三)宗教を改正せんとする者は是れなり

法律は倫理の明文に定められたる者なり此の明文を制定せんとする作用明文を實行せんとする作用は社會現象にして通常主權者の操縦する所に係る法律の實行は一日も廢すべからざるを以て此の現象は恆久不變的なり然れども法律は常に變遷しつゝあるなり即ち社會個人の心理並びに生理情態の變化及び社會現象の生滅に隨て絶えず變遷しつゝある者なり

娛樂的機能は即ち社會の娛樂を目的として起りたる機能なり一々枚舉し難しと雖も演説講談圍碁舞樂其の他此の類なり

以上の如き機能が相互に補充するを以て社會團體は維持せらるるを得社會を以て有機的なりとなす所以は茲に在り故に其の一の機能を欲せば恰も動物の四肢一節を断せしと一般完全なる生活を維持するに能はざるなり然るに實際の社會は

此の造不自由なる者にあらず其の一の機能をなしつゝある者が偶然失はるゝ時は忽ち其の内部より之を補ふ處の者を生ず此の點に於いては彼の下等元形質の一塊が其體を支分せらるゝも猶も能く生活すると似たり此の故に社會は彼の元形質に比すべきなり

社會の此れ等機用を成遂する處の團體が相應に其の業務を取りつゝある時と雖も之れより弊害の生ずるあるは免れ難き處なり況んや機用的團體が病的なる時に於いておや茲に於いて此の弊害を救正するための團體を生ず例へば立憲制の下に於いても司法其の宜きを得ざるものあるため辯護士團體の生ずるあり冤囚が生活の困難に逢遭するが故に茲に冤囚保護の團體あるが如し其餘實業團體より生ずる弊を防ぐがために種々の團體あり娛樂の團體に對して矯風會あり教育の不普及を補ふが爲め夏期講習會夜學校等の種々の團體を生ずるに至る

故に社會内の團體は極めて多く且つ年を追ふて増加するの傾向ありと雖ども其が社會現象たるや則ち一なり則ち皆な社會其物を動機として發したるや則ち一

なり。是の故に此の如き團體の増設又は委縮は社會の如何なる情態に本づきしやを察知することを要す。

第二節 社會進動論

社會の機用的團體は個人に作用し爲めに慾望を發達せしめ之れがため更に機用的團體を生ぜしむ故に此の方面より見れば社會の進動は社會現象に始まり個人を通じ更に社會現象に至り又個人を通じ又た社會現象を生じ循環窮りなし科學が年々細末に分れ慾望が愈精緻になるは即ち是れなり。

社會は之を二方面より觀すべし。一は靜的方面より、一は動的方面より。靜的方面は即ち個人の肉體並びに精神情態を指す者なり。動的方面は即ち社會現象を指すなり。何れを以て社會現象は動的なるかと云ふに社會現象は即ち社會を以て動機とせる個人の行動なればなり。機用的團體は名詞なれども機用的團體の團體たる所以は個人の社會を動機とせる行動に外ならざるのみ。職工が器具を製しつゝあるは一の行動にして社會現象なり。何んとなれば社會を動機としつゝ行動しつゝあればなり。其餘類推すべし。然るに靜的方面は個人日常の生活に在る時の精神並

ひに肉體情態なり。

是の故に社會の進動は靜的方面と動的方面と代はる代はる反動しながら漸く複雑に赴く者と謂ふ可きなり。

若し此れのみならず社會の進歩は遅緩なるべきも實際彼の靜的方面を影響する勢力は社會以外に之れあるなり。即ち其の外の社會は種々の目づらしき者を示めして以て慾望を鼓動せしめ自然界の情態は或は社會をして恐れしめ或は社會をして喜ばしめ或は社會をして悲しめ其の他種々の條件を社會に當て嵌め以て社會内の個人の精神並びに肉體の情狀を變化し社會現象をして續々起發せしむ。凡そ一社會の進歩する否とは此れ等外界情態に由ると極めて多し。交通の便なる所は交通の不便なる所より進歩すると例へば古代の希臘今代の日本に徴して明かなるべく。外圍の變化多き所は外圍の變化少き所より進歩すると之を英吉利と希臘と印度と支那とに徴して明かなり。

以上は實に社會の進動なり。而して吾人は社會の進化は外界情態に由ると大なるを述べたり。然れども此の外に於いて猶ほ社會の進歩を規定する所の者あり。何ん

ぞや、即ち前に述べたる所の人種固有の性能なり。人種固有の性能なる者も永き年月の間には次第々々に變化し來たり或は社會をして消沈せしめ、或は社會をして興隆せしむ。蓋だし社會の盛衰は社會現象其物の盛衰にして社會現象其物の盛衰は實に社會の個人の性能に由りて規定せられず、むばあらざるなり。個人の性能にはわらざるも、然かも社會現象の消長を規定する者あり、何んぞや、曰はく、各人種の信奉する根本觀念是れなり、各人は信仰に由りて動かさる。純粹の理論に由りては動かされず、故に哲學者が如何に宇宙の眞理、國家の眞理は此くあり、故に此の如く行動せざる可からずと主張するも、各人が之を信奉せざる間は之をして行動せしむると能はざるなり、之に反し極めて蒙昧無智なる事と雖も、各人が之を信奉する者は其れに隨て行動すべきなり、吾人が此に根本的觀念と云へるは先づ例を以て之を示さば、主義若くは宗教なり、主義は即ち動機なり、個人を以て動機とする者あり、國家を以て動機とする者あり、世界を以て動機とする者あり、之に由りて社會の消長定まる。社會の個人が各己れの利をのみ計りて他を顧みざる時は相互に軋轢し鬭争已む時なく、何に由りて社會の進歩あるとを得むや、恰も鳥合

の犬群に一塊の肉を投せしが如く、身體の活動力は専ら競争のために消費せらる。個人主義の社會に不利なる以て明かなり、國家主義は則ち然らず、國家の利益のため個人利益を犠牲に供せんとする者なり、故に各個人が眞實に國家主義を取る時は内は相互に讓歩し、外は外國と利益を争はむとするの勇氣あるが故に社會現象は隆々として高まるべきなり、往古羅馬の盛んなるや、外夷狄に逼まられ洵々として常に抗禦を以て志となし、所謂國家主義なる者は彼等の中に完全に實現せられ、羅馬の強きと天下比なかりし、然るに國家主義の結果、強盛の結果として漸く四隣を併呑し、遐邇遠近來り服するに及び、國家主義は變じて世界主義となれり、已に彼れ等に抗禦の必要なく、精神活動は頓に墮落し、遂に羅馬帝國の衰亡を來たすに至れり、由是觀之、國家主義の社會に必要な豈に明かならずや、世界主義は則ち然からず、何等個人の精神中に明瞭なる觀念を起さしむる能はず、以て動機となりて活動する能はず、主義としては極めて薄弱なり、**正統** 宗教も亦た個人の性格を養ふ者なり、故に其の社會進化に影響あるとは元より疑ふ可からず、耶穌教は歐洲人に、(一)深沈の性、(二)専心の性、(三)博愛の性を養へり、此を以

て、歐洲近世の文明は開かれたり、其の宗教の社會進化に關係あるは一々之を枚擧するに遑まらざるなり。要之社會の進動は動的方面と靜的方面との相互的複雑的進動にして進歩に大關係あるは即ち此の靜的方面に於ける個人の性能なり。宗教又は主義は此の性能に大關係あるを以て社會の進歩に影響あるなり。

本論 二

第一章 社會と個人との關係 (一)

社會に目的あるか。社會其物としては何等の意なく口なし。故に社會の目的と云ふは頗る不穩當のとに屬す。但吾人は社會の傾向の如何なる方に向ひつゝあるかを見るのみ。古來東西の社會其の繁盛の時代を終へて漸く衰退に近づきつゝありしを知るも而かも社會が其の目的に達せしと云ふ者あるを聞かず。故に吾人は知る。社會には傾向ありて目的なきを。但だ其れ傾向なるを以て或る底止點あるとなきなり。如何なる社會も此の傾向に向て進み、社會の靜的方面の状態に準じ或る者は遠く迄至り或る者は近くして止まり或る者は急に盛んにして急に衰ふ。

然らば則ち社會の傾向とは何んぞ。曰はく之を社會現象に徴して定むるに如くはなし。社會現象なる者は皆是れ個人を對象とする者なり。個人の慾望を満足せしめ、出來き得る限り個人に自由を與へんと欲す。

一切の機用的團體は即ち個人の生理狀態並びに心理狀態を對象とする者なり。其の或る者は個人を個人全體として對象とする者なり。例へば政府の如き及び教育の如き是なり。要するに社會の機用的團體は個人の生理發達並びに精神發達を計る者と社會の秩序を保たんとする者との二あり。蓋だし社會を離れて善惡なし。善惡は徹頭徹尾社會の中に於いて言ふべきのみ。社會の安寧に貢獻する者は善にして之を破壊せむとする者は惡なり。故に一々の行爲必ずしも善惡を以て判すべきにあらず。例へば舊慣を破れる場合の如き其が果たして安寧秩序に害あるや否や疑はしきなり。之を善と評し之を惡と評すべからず。智識の小にして目前のとのみを計る者は惡たるを知らざるも智識大にして百年の後を觀破する者は見て以て惡となすべきなり。殊に新倫理新習慣の生ずる場合には如何なる聖人も善とも惡とも判断し難き者あり。然れども聖人識者は之を善とか惡とか評せむとす。此の

時に當たり、彼等の思考中に上る究竟の標準は各個人が此の新倫理新習慣に由るも社會の秩序は亂だされざるや否やと云ふに在り。此の故に善惡なる名稱は社會の安寧秩序を以て標準となす者なり。

個人は快を求め、苦を避けんと欲し、種々の慾望あり、如何なる慾望も皆自然に存在する者なり。之を満足する何んの不可わらひ、唯だ社會の安寧秩序を妨害せざる範圍内に於いて之を満足すべきのみ。蓋だし個人の慾望は(一)肉體的慾望、(二)智識的慾望、(三)精神的快的慾望、(四)意的慾望等あり。物質的慾望は即ち肉體の快樂にして之に物質的慾望あり、生理的の慾望あり、智識的慾望は即ち一切を知らむとする慾望にしてのみ、精神的快的慾望は精神の快樂を増すもの、即ち音樂、講談の類なり。意的慾望とは自由意志活動の慾望なり。此れ等の慾望は年を追ひ世を累ねて漸く精微に赴く者なり。出來き得る限り之を満足せむとするは個人の希望なり。

此の慾望を出來き得る限り満足せんとする傾向と個人間の調和を計る所以の傾向とあり。此の二傾向は相ひ交叉して倫理となり、宗教、箇條となり、一轉して法律となる。法律、宗教、箇條及び倫理は交叉線なり。交叉線は即ち個人の經域なり。故に、全社

會を通じて、一個の組織を爲さざる可からず。此の經域内に個人は陶冶せられ、以て其の時代に於ける普通の人格をなす。人格に完全の人格換言すれば理想的の人格なし。當時の倫理外兩者に含む者に合一せる者之を當代の完全なる人格となす。例へば孔子の如し。孔子の時經禮三百あり、緯儀三千あり。合して一の有機組織をなす。孔子は非常の勉強を以て此の組織に合一せむことを企て、老年に及びて始めて其の目的を達するを得たり。曰はく七十從心所欲不踰矩と。孔子は此の時始めて當代の完全なる人格となりたるのみ。

余が此に人格と云ふ字に含ましむる所は唯だに客觀的に倫理に強合することを指すにあらす。無意識的に之に合する主觀的情態を指すなり。

此くして人格の維持即ち一方より見れば交叉線が各社會の通有物たり。而して社會進歩の傾向は

- (一) 交叉線未だ確立せず
- (二) 交叉線の組織をなす
- (三) 交叉線は主觀的に人格内に存す

の三階程を通らざるを得ざるなり。第一の階程は交叉線が全く存在せざるにはあらざれども其の數少なく、且つ支吾する者多きなり。此れ下等動物の社會若くは野蠻未開の社會なり。一社會内に於いて一部の倫理と他部の倫理と異なる如き是れなり。第二の階程は即ち倫理が確立し、其の上一の統一體をなせる時にして支那周代の文明及び羅馬隆盛の時代及び日本の徳川幕府時代の如き是れなり。然りと雖も此れ等は完全に第二階程に達したるにあらず。唯だ比較的此の時代に達したるのみ、實に完全なる倫理の統一體は學者如何に苦心するも之を制定すると能はず。第三階程は第二階程が達し得られたる後にあらざれば達し得べからざる最高理想的時代なり。此時代の意味如何んと云ふに已に統一せる倫理體系ある故個人は全く其の中に陶冶せられ皆な完全なる人格となり居り、倫理を説く必要あらざる時なり。

此の三階程の論は實に人格の外より言を立てたる者なり。次に人格の内部よりして立言すれば社會の進歩は即ち人格の情態が漸く精微に複雑に赴くとなり。換言すれば人間固有の諸種の慾望が漸く満足せられんとするなり。倫理を以て人格

の客觀的方面となし、諸種慾望を以て人格の主觀的方面となさば則ち此の兩方面を完全に發達せむとすることが即ち社會の傾向なりと謂はざる可からず。所謂人格の客觀的方面なくんば則ち主觀的方面の享樂は本より望むべからず。主觀的方面のみありて客觀的方面なきことは萬々之れあり得べからず。客觀的方面ありと雖も主觀的方面の發達せざる社會は未だ進歩せる社會なりとなす可からざるなり。是の故に社會の傾向は此の兩方面の完全なる發達なりと解すべきなり。然るに社會の個人は社會一切機用の影響を受ること能はず、又た受くるの必要なきものなり。又其の人の遺傳的狀態に由り受るも其効なき者あり。此に於いて個人の差を生ず。人格の差あるも亦此れと同じ社會的機用作用の度を異にするなり。家庭に於いて學校に於て教會に於いて十分なる陶冶を受けし者は完全なる人格を得ると雖も此の陶冶を受ること能はざる者は不完全なる人格を有するのみ常識の差に至りては明かに社會的機用作用の度に由りて異なる者なり。常識を養はんとする社會的機用は十分に用意せられつゝあり、新聞にまれ、雜誌にまれ、普通學の書物にまれ是れなり。

然るに大勢より見れば社會の觀念は漸く個人中に實現せられ、之を中心としても社會に關する觀念が各個人に共通に實現せらるゝを見る。此に於て社會のことに干し各人の觀念が大に相ひ一致する所を生じ、隨て社會の微小の事に對するも一般の輿論を勃起するに至る。ウーワード、又ヴント、諸氏が社會意志の存在を認むるは即ち此の點に在り。故に彼等は謹んで集合意志(Gesamtwille)と命名せり。諸人の同く意志する所の義なり。

第二章 社會と個人との關係(二)

以上は主として社會が個人に及ぼす影響を論述せり。次に進むで個人と社會との髓腦的關係を求めんと欲す。社會は個人の集合なれども石砂の堆積と同一視す可き者にあらず。石砂の堆積を名けて Conglomerate とす。全體と一部との差は單に分量の差なり。社會は Conglomerate にあらず。故に全體と個人との差は性質の差にして分量の差にあらず。何を以て然るか。云ふに個人は社會の一部の痛痒に由りて獨り精神的に感受するのみならず、文實に生理的に影響を蒙る者なり。即ち社會は一の有機體なるを見る。有機體は有機體として一個なり。單なる堆積物とは

其の撰を異にす。是の故に個人は社會内に在りて一個の機關なり。全體の機關の一部なり。全體なくして一個のみ依然として存立すること能はず。縦ひ存立するも大に其の趣きを異にすべし。

然かるに機械には機械としての用あるがために各部は此の目的を達するため存立し。有機體には生活なるものあるがために此を維持せんとして各部の細胞は存立云ふしつゝあるなり。例せば一本の木は細胞の集合なれども生活なる一の氣が活動しつゝある故に此等の細胞が其用をなしつゝあるなり。細胞と細胞との間には物質的結合あることなきなり。唯だ此の生活なる一個の連接體あるのみ。社會が一の有機體なる以上は此の生活に該當する所の個人を連接する所の一個の紐帶あらざるなきを得ひや。然らば此の紐帶は何んぞや。曰はく、集合意識是れのみ。此の意識は見るべからず。唯だ個人の精神内に觀念として存立し、決して去ることなきなり。之を木に譬ふれば生活は細胞を離れて存在する能はざる如く集合意識は個人の精神を離れて存在するにあらざるなり。個人は集合意識に由りて結合せられ、以て一團をなす。社會現象は社會を目的とする行動にいて即ち集合意識に出る

者なり其れに種々あり然れども皆社會維持が目的にして個人を支持するが目的にあらざる是の故に社會現象は皆是れ社會其物を維持せむとする者而して此れ等諸現象が相ひ組合して以て一の社會を維持するを得社會が一個體なる所以由りて以て明かなり

社會は已に一個體なり故に個人とは分量の差にあらずして性質の差なり然るに個人なければ社會なし恰も細胞なければ有機體なきが如し此の故に社會は個人の集合なると同時に一個體なりと謂ふべきなり個人の社會に於けるは一車の全機關に於ける如く一細胞の全有機體に於ける如く全體のために其の形を變じつゝいあるなり即ち社會なる目的を達する様に形を變じつゝいあるなり此れがために必要の社會的機用を爲し且つ其の結果を享受す

社會は個人の目的なり社會に目的あるにあらず社會には傾向あり事は前に見ゆ然れども究竟的の目的にあらず人類不得の手段必然の運命のみ

結論

第一章 結論

余は社會を以て自然現象となし社會現象は集合を目的として起る者なりとなせり然れども其が直接の動機たる者は數個あり

- 一、同情
- 二、模倣
- 三、競争

等なり集合意識の背後に此れ等の動機あり集合意識と協働して行動に見はる此れ等の動機は即ち説明の原理なり何に故に或る一の現象が起りしやを知らむとせば此等の原理に由りて説明するより外なきなり例令ば慷慨家の急に數多の勃興を見しは何故ぞやと問はゞ即ち模倣によりて起りし者なることを以て答ふ可く或は犯罪人が數多起りし所以は何ぞやと問はゞ同情ありしためなりと云ふべきなり以上の三動機は社會現象の起る様式を規定する者なり

社會現象相互の關係及社會現象と社會の靜的方面に於ける異狀との關係を精密に建設するは社會學の任務なりと雖ども余は未だ此等に付いて研究せず後來此の方面に向て研究せんと欲す。

余は固く信ず、社會學を言ふ者嘗て社會現象の何にたるかを了解せし者少なきを彼等は人間の集合體内に起る所の現象は皆な社會現象なりとなせり。

第二章 社會に汚隆ある所以

社會が古より今に至る迄汚隆盛衰ある所以の者は何んぞや、各社會には各固有の精神的組織あり、此の組織に由りて社會の進歩と否とは大部は規定せらる。此の故に組織を變動せずは社會の運命は變動せられざるなり。然るに此の組織や容易にして變化すべきにあらざり、數百年にして變化すべきにあらざり、此の故に、社會の汚隆は此に歸せらるべからざるなり。然らば何にか歸すべき、曰はく、人民の變動すべき精神的性能に歸すべきのみ、此の性能二あり、一は歴史及び地形に由りて形成せらる、一は根本觀念に由りて形成せらるる者是れなり、社會の人は己を以て、其の社會の一員と心得居るが故に、該社會の歴史は其の精神を影響すると極めて大

なり、勇者冒險の歴史に富める社會、民は勇者冒險的なり、戰亂を累ねたる後の民は戰爭的か、然らざれば厭世的なり、小兒は其の父祖の業を慕倣し、父祖の遺風に陶冶せらる。社會は社會の歴史を慕倣し、其の遺風に陶冶せらる。歴史が個人の性能を作ると實に忽にすべからざるなり。社會は土地の上に住す、其の土地の形勢、廣狹は皆な個人を影響す。怡も高屋に住む者は心自ら大なる如く、小屋に住む者は心自ら小なる如く、大國の民は心自ら大に、小國の民は心自ら小なり、地勢、峻なる處の民は其の觀念を腦中に有するが故に、心に峻に、地勢、易なる處の民は其の觀念を腦中に有するが故に、心に易なり、土地の大小、峻易は形式なり、此の形式を有する觀念が、腦髓の中心となるが故に、萬事、萬行、此形式に由りて影響せらる、なり、歴史と地形との人心を影響するや實に此の如し、次に、所謂根本觀念とは即ち行爲の標準、即ち主義、又は宗教、是れなり。

第三章 世界は社會なるか

凡そ自然に存立せる社會は皆な一の制御的機用を有す。換言すれば一の主権力を

戴く者なり。現今の各國民皆然かり。然かるに世界は今や一の主権力を戴かず。列國分争の時なり。後來世界は一の主権力を戴くに至るや否や。是れ元より豫測し難きなり。吾人の知る所は

(一) 世界は有機的になると

(二) 世界は平等になると

(三) 世界は世界的心意の發生を見ると

等なり。現今各國は自國の利のみを圖りつゝあり。然かも己れを愛する者は必ず人を愛すと云へる如く。各國は互に親密を事とし。又其の長所を交換するを以て利となせり。故に世界は一の有機體をなせりと云ふも過言にあらざるなり。交通の頻繁は漸く血脈言語風習人情を混淆し。世界の人種をして大差なからしめんとす。世界の人は世界の觀念を有し。然かも此の世界の觀念に附隨して種々の共同共通の點を連關せしむ。其の點の多くなるに隨ひて。彼等の間の反情は漸く和ぐと同時に世界を以て意となすに至る。即ち世界の一部に或る事起るも己れは之に感觸するに至る。此に於て所謂世界心意の發生あり而して各國民間の仇視の條件は漸く排除

せらる。

然らば世界は合同せらるべきか。換言すれば一の主権力を戴くべきか。曰はく知るべからず。知るべき者は其れ唯だ共和の有様に至るべきことなり。

跋

往年余病を得て郷里に歸へり、随意に西洋の典籍を繙き、偶々集合意識の説に思ひ當り、之を以て社會現象に臨むに社會現象は悉く皆な集合意識に統一せらるべき所以を知れり。即日筆を執りて以て斯篇を稿せり。然りと雖も其の説たる全然新異にして他の之に類する者無きがため之を筐中に藏し敢て人に示めざりき。爾後研鑽數月、殆んど疑ひを容るゝと能はず。於茲乎刊行以て有識者の教を乞はむと欲するに至れり。

抑も集合意識なる者は集合せむとする意識作用にあらずして集合なる意識なり。換言すれば個人の集合なる意識なり。然るに此の集合なる意識は本篇の心理學に於いて論述せしが如き理に由り、感情を伴生すると甚だしく隨て個人の行動に表はるゝに至る。此の如くなるが故に集合意識は一方に於いて社會の基礎なると同時に一方に於いては社會現象を惹起する所以の心的基礎たらずむばあらず。然らば集合意識なる者は如何んして生ぜしやと云ふに即ち客觀界より得たる所の意識なり。吾人を以て之を見るに社會現象は一の自然現象にして生物は皆な

遺傳的に集合し得る者なり。其の最も下等なる者例へば蟻蜂の類に在りては集合に對する意識あるとなきなり。動物の階級を登るに隨ひ心意力の發達を見ると共に集合意識は徐々に個人の精神内に發生し來るを見るなり。人類に至りて極まる。人類の中に在りても本論一の序言に於いて論述せるが如く滔々進歩して已むとなきなり。然るに意識と遺傳とは合して一定量をなすかの如くに意識の範圍が廣くなるに隨ひ遺傳の範圍は漸く狭し。犬を以て之を譬ふれば犬は大低遺傳的に行動ふ。彼の游泳し、飲食し、阿媚するが如き學ばずして能くするなり。人間は學ばずむば能はざるなり。以て遺傳の範圍の減小せるを知るべきなり。之と同く下等動物の社會は萬事遺傳的に成遂せらるれども人間社會に至れば殆んど意識的に成遂せられざる者なきなり。換言すれば皆な集合意識に由りて成遂せらるゝ者なり。是の故に集合意識なる者は外より得たる者なりと雖も下等動物の社會的遺傳性と一系の中に在るものなり。

彼の蟻蜂の群に看るに分業法行はる。然れども皆な遺傳的になしつゝある者なり。彼の分業を爲せる者は、目的は集合に在り。即ち自己のためならず、彼れのためなら

3/36
 ず、只だ集合のためのみ、人類は之を意識的に行ふ。換言すれば、集合を目的として行ふ者なり。社會現象は集合を目的とせる者なると之に由りて明かなるべし。因に云ふ、集合を目的とせる行爲は即ち集合意識より出る行爲にして二者別なしとなす。今や社會學の聲は諸方に歡呼せらる。社會學が單に諸社會科學の簇集ならば、免も角、苟も一個獨立の科學として建設せられむには、其れ唯だ集合意識説に由るのみ。其れ唯だ集合意識説に由るのみ。

遠藤隆吉

明治三十四年六月廿八日印刷
 明治三十四年七月一日發行

定價 拾錢

著作者 遠藤隆吉

東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地

杉山辰之助

大阪市東區備後町四丁目八十五番屋敷

石井鈎三郎

東京市京橋區築地三丁目十五番地

淺野榮作

印刷者 帝國印刷株式會社

東京市京橋區築地三丁目十五番地

印刷所 帝國印刷株式會社

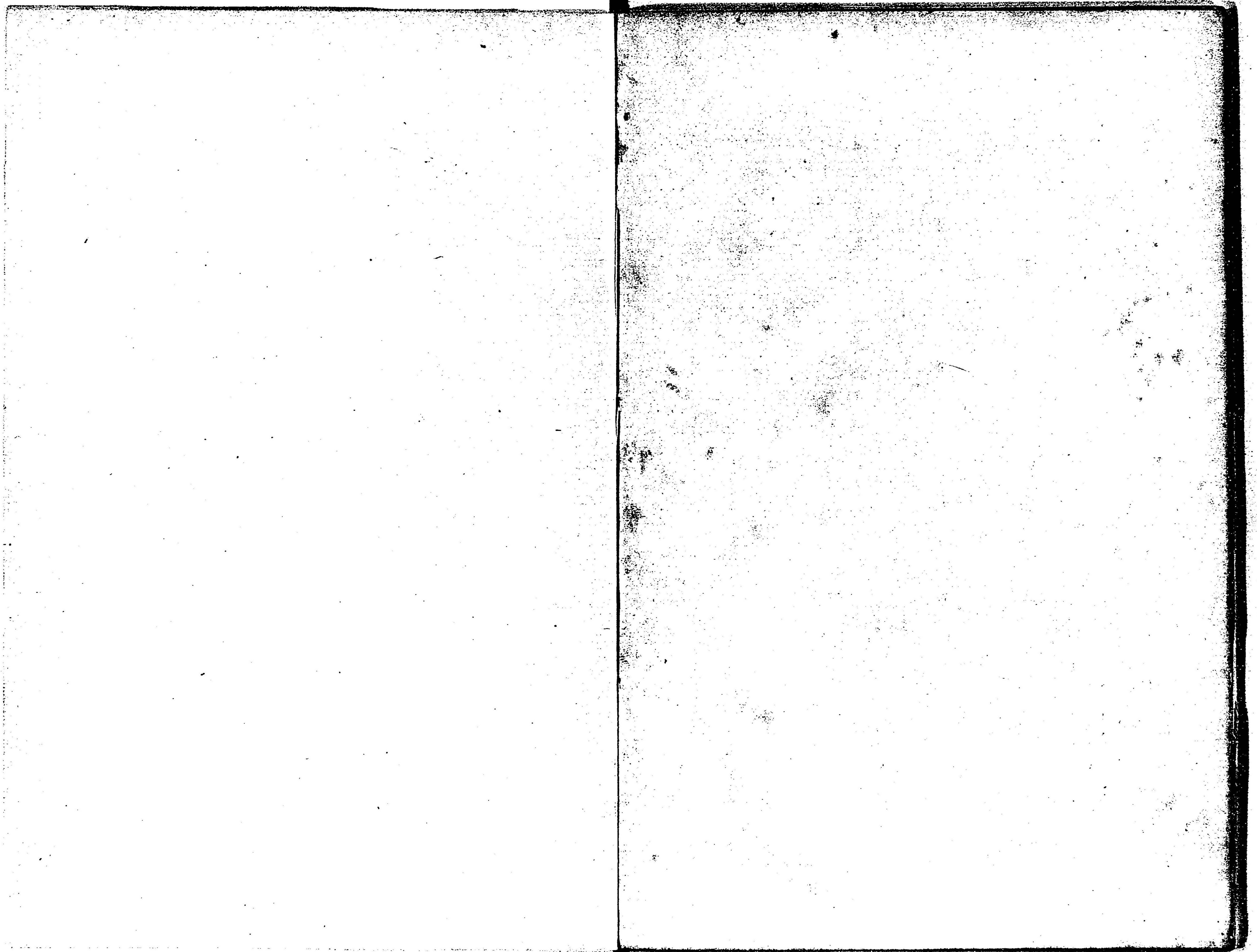


發兌元

東京市日本橋區本石町三丁目

大阪市東區備後町四丁目

金昌堂



91
35

